

GRAPHICATION

G2

グラフィケーション2

DEC 2016

7

NO.



Interview

インタビュー

海賊史観から
世界を見る

稲賀繁美



国際秩序を問い直す

——稲賀さんは「海賊史観」というユニークな歴史観を提唱されていますが、海賊史観とは何なのか、何を目指しているのでしょうか。また、なぜ「海賊」で「山賊」ではないのですか。

「海賊史観」は、出発点としては経済学者で静岡県知事の川勝平太さんの「海洋史観」のバロデーです。川勝さんの海洋史観とは、梅棹忠夫さんの生態史観に海洋での物資や人的な移動を上乘せした構想ですが、その物流の実態は、そのほとんどはいまで言うところの海賊行為に他なりま

せん。十五世紀の末にドリデシリヤス条約というものがスペインとポルトガルとの間で取り交わされますが、これは、平たく言えば地球を両国で山分けしようというところでもない大泥棒の計画です。そして、それは地球の資源は神から我々キリスト教徒

に与えられた恩寵だとする信念と抜き差し難く絡まっています。現在に至る世界秩序は、この世界大の海賊行為の上に成立しています。「海賊史観」は、その五百年の歴史を問い直すことを提唱しているんです。なぜ海賊であって山賊でも馬賊で



海賊として得た莫大な財宝を持ち帰り、エリザベス1世からナイトの称号を受けるフランシス・ドレイク。後にイギリス海軍の提督になった（提供：Heritage Image/PPS通信社）

もないのか。それは世界制覇が制海

権と密接に繋がっていて、大英帝国

の覇権も海賊と無縁ではないからだ

です。エリザベス女王陛下の認可の下

での海賊船団なくしては、現在のシ

ンガポールも存在しえませんが、

では、なぜいま、海賊行為の見直

しを進めるのか。いまや電子技術の

発達によって、地球の表面は World

Wide Web のネットワークに覆わ

れています。ところが現在の国際法

やさまざまな法律は国民国家という

単位を基準として成り立っており、

自在に越境する金融や電子情報網に

はついていけていない。ハッキング

とかネット海賊といった行為は技術

に法律が追いつかない空白地帯で発

生しています。それをきちんと扱う

ためには、いままでの国際社会の倫

理や道徳では間に合わない。概略そ

れが海賊史観を半分冗談で、半分真

面目に提唱する理由です。

——中世というと従来は

暗いイメージでしたが、

最近は人間が自分の欲望

を自由に表現した時代と

言われます。海賊も、歴

史学者の網野善彦氏の言

う職能人の一種かもしれ

ませんね。

地理、時代の双方をめぐ

って、どの線引きが普

遍的に有効か、歴史的に

正しいかを巡る議論が盛

んですが、この諍いから

建設的な未来は生まれま

せん。ゼロサム・ゲーム

だからです。むしろ正しい

唯一の線引きを求める

心性を問い直すために海

賊史観を提唱しています。

網野善彦ほかの海民の研

ケニヤ沖を走るダウ船 (提供: Michael Yamashita/PPS通信社)



究は、明治維新後の国際秩序が築いた国境という線引きがそれ以前の時代には無効であったことを示してきただけです。

欧州史を見ても、暗い中世という誤解はオットマン（オスマン）帝国による地中海支配を否定的に捉えたことに起因します。むしろイスラーム圏から欧州に十二世紀ルネサンスがもたらされ、またイスラーム圏によって支配されていた中東を回避してインディアスを目指した「大航海時代」（この用語も時代遅れですが）という国家的海賊行為の世界尺度での拡大が、現在に至る国際秩序の根幹をなしているはずで。

そして海洋文化史に着目するならば、西側世界の拡大以前から、アラビア海やインド洋ではダウといった船舶による盛んな交易がありました。その象徴がアストロラーベ（天文観

測器械）でしょう。天測による太平洋の遠洋航海術はメラネシアやポリネシア、さらにミクロネシアでも、西洋人の侵入以前から高度に発達していて、その遺産はいまに至るまで受け継がれています。

——大阪の堺は「東洋のベネチア」とヨーロッパ人から言われていたそうですが、日本は鎖国に入ります。その鎖国の間に日本人に「勤王革命」が起きたという人もいますね。

スペインのフェリペ二世が亡くなったのは一五九八年。豊臣秀吉の没年と同じです。この二人がもう少し長生きしていたら、どうなったか。台湾の北部、淡水にはサン・ドミンゴ要塞が残っていますが、ここでは朝鮮出兵に続いて日本が台湾に侵攻するのではないかと真面目に恐れていました。スペイン海軍が倭の水軍と激突する可能性は決して夢想では

なかったんです。文学研究の芳賀徹さんが提唱する徳川の平和、peace of Kugawana は、そうした可能な世界史の反指定として実現したものでした。鎖国と言いつつ平戸や長崎を通じて物流の交易は続いていたし、十八世紀中葉以降には蘭学も勃興します。経済学者・速水融先生の「勤王革命説」は衆門人別改帳などで人口と耕地面積を計測した上での実証的なデータに裏付けられています。ただ、これだけの農業収益の労働集約的な生産性向上は、同時代の欧州でも確認されていません。またそれ以前の、日本から中国への銀の供給が南米から欧州へのそれと相俟って、世界金融システムにいかなる役割を果たしたかはまだ研究途上の課題でしょう。ベネチアと堺の比較もここで有効となるはずで。

その上で、政治的な人的交流の制



裕福な貴族たちの出資で海賊を働いたと言われるキャプテン・キッドと貴婦人たち(提供: UIG/PPS通信社)

限と交易史の上での海賊行為の横行とは矛盾しない現象です。いわゆる唐行きさん(主に東南アジアへの出稼ぎ娼婦)は九州から供給されて東南アジアに広く分布していますが、日本人町の経験が明治以降に至る交易の先兵となったことも具体例から立証されています。政治体制としての海禁政策が商業上の交易にどう作用したのかも、探つておく必要があるでしょう。

海賊は自由なのか？

——海賊に民主主義の原点を見る人もいますが。

海賊集団に現在の政治的理想を投影する立場の

あることは承知しています。一時的ではあるにせよ、そこに近代的な社会保障制度の萌芽すら見られたという説もあります。とはいえ、だから海賊型に世界を改造すればよいとはならない。欧州ではとりわけ電子機器での通信に対する政治的な規制に反対して海賊党と呼ばれる政党運動も展開されました。そこに必然の論理は認めるとしても、通常、海賊行為と言えはあくまで国際秩序の中で小規模な反乱、あるいは攪乱行為と見做されてきました。そのことを見落とすのは禁物です。

国家規模の大海賊、あるいはTPPに見られるように自分たちの利潤のために都合のよい世界秩序を構築する大規模な制度づくりは、なぜか海賊行為として国際社会による糾弾の対象とはなりません。海賊史観で課題にしたいのは、どうして大規模

な搾取や暴行は国際社会の名のもとで正義とされ、一方で地域的な規則違反は海賊のレッテルで犯罪行為と見做され、抑圧され抹殺されるのか、そのメカニズムの解剖です。

海賊行為の是非の再検討抜きに世界秩序の再編成を目指すのは無謀です。

——稲賀さんは3・11を契機に海賊に興味を持つようになったとか。

3・11と海賊を結びつけているのは私の発案ではありません。東日本大震災に関わる社会分析に動しんだ多くの論者が「海賊」に言及しています。一方で巨大産業や政界が「焼け太り」よろしく、大災害からの復旧を旗印に巨大な利潤を得る体制を固めており、他方で行政や金融の救済措置から落ちこぼれた被害者の一部には違法行為と指弾されかねない逸脱によって、かろうじて生活を支えるほかないという状況も生まれて

います。その間で既存の社会組織や法律体系には頼らず、場合によってはそれに抵触し、あるいは既存の秩序とは別の仕組みによって危機を乗り越えようと模索する人々も出現しています。彼らが憚らず自らを「海賊」と呼ぶ場合すら見られるんです。

そして大衆向けの文学では「海賊」が流行語となり、社会的な犯罪者をむしる虚構世界のヒーローやヒロインとして英雄視するような傾向が、将来の先行きが見えない国民の深層心理に育まれているという事実も無視できないでしょう。時代の潮目と言ってもよいでしょうが、これを海賊という切り口から見落とさないように留意することが喫緊の課題かと思えます。既存の秩序が綻び目を見せると、その綻び目には必ずその空隙を埋めようとする現象が発生します。既存秩序の側はそれを「海賊行

為」と呼んで排斥しようとはしますが、もはや既存の秩序が維持できない以上、違法行為と見做される逸脱をいわずに鎮圧しても秩序の回復は覚束ず、かえって事態を悪化させます。それが海賊に着目する所以です。

——海賊は漫画、小説、映画によく描かれますが、印象に残るものは？

大衆文化の中で多くの作品が生まれ、消費されていますが、ここでは個別の指摘は避けたいと思います。ただ海賊的な違法行為に多くの人が自分たちの満たされない日常の代替幻想を託そうとしていて、法秩序の破壊者であるはずの「ならず者」たちが、空想の世界であれ英雄視されるという現実から目を背けてはならないでしょう。お縄を頂戴して処刑される義賊に人々の同情が集まるのは、そこに人々の中の矛盾の集約を見るからでしょう。

いまではほぼ鎮圧されたソマリア海賊を巡る実話に取材した映画に『キャプテン・フィリップス』(二〇一三)がありました。米国海軍の全面的な協力で作られた作品で、海賊への威嚇と米国の正義貫徹の意思も露わな物語ですが、私には国際秩序なるものの偽善を告発する側面も透けて見えるような印象がありました。米国海軍がよく文句を言わなかったものだという感想とともに、そこまでの自信に溢れた軍事大国の異様さには畏怖を覚えました。スリラーに分類されているようですが、私にとっては暴力映画にほかなりません。海賊集団が「自由」などからは程遠い境遇にあることを描いた部分は貴重だと思っていますが。

資本主義のパラドックス

——技術が発展すればするほど、

いわゆる海賊版をつくる技術も発展し、問題が複雑になります。ヨーロッパの「海賊党」はこの問題に焦点を絞っているようです。

アイスランドの動向も含め「海賊党」の帰趨については専門の解説が日本語でも存在しているの、そちらをご参照いただくのがいいでしょう。ただ電子通信環境に関して、従来の議会制民主主義の手続きの中で規制緩和を含めた解決法を模索するのが海賊党の方策であるならば、そこには残念ながら原理的に無理があるだろうと考

富の分配や政治の透明性などを訴える海賊党は多くの市民の支持を得た
(チェコ・プラハ 提供: Alamy/PPS通信社)





東京・渋谷

えます。一方で金融商品や知的財産に関する海賊行為、他方では国家機密にまで至る情報管理と破壊行為との脆さ。その両者がサイバー空間で野合を遂げているだけに、抜本的な解決法を見つけることはきわめて困難です。無限の自由も完全な統

制もありえない。海賊行為が自然発生の逃え向きの環境が否応なく存在している、それが現状なのだという認識から出発するしかないです。たしかに海賊行為は困ったものですが、それを根絶やしにしようとするとかえってとんでもない副作用が

発生します。一言で言えば、サイバー空間での海賊行為の跳梁の裏にあるのは、実体経済から遊離した金融経済の異常肥大という現実でしょう。資本主義の行き着いたところで現今の海賊行為が蔓延しているのは、単純に言って資本主義の原理そのものに海賊的な性格と機構が内在しているからです。となれば、海賊撲滅のためには資本主義の常識を覆して、現在の価値観を根底から洗い直す作業が必要となります。

何を大袈裟な、とご批判を受けるでしょうが、現今の人類の世界史がこの局面を迎えているのは疑いないように見受けられます。そもそも旨い商売が海賊行為を呼び込まないことなどありえない。となれば、ある程度の海賊行為を許容するようなマージンを備えた制度設計が必要ということになりますが、現実のピジネ

スの世界も、政治の世界も、そんなことは百も承知で動いています。世間知らずの学者が机上の空論よろしき解決策を示しても、笑いのものになるのが関の山でしょう。忘れてならないのは、秩序というものは、自らの正義を維持するためには撲滅すべき悪を自ら生産せねばならない宿命を負っているということです。

——日本人は海に囲まれていながら海外に出て行くという発想はあまりなかったようです。この傾向は若い人ほど強いとすら言われますね。

最近の日本人が海外に行きたがらないというのは、日本が国民国家として成熟を越えた老年期を迎えていることの裏返しではないでしょうか。海外から有能な若者たちが参入しており、またヴァーチャル環境では国境を越える必要もないままに経済活動が無国籍化し、全球化が亢進して

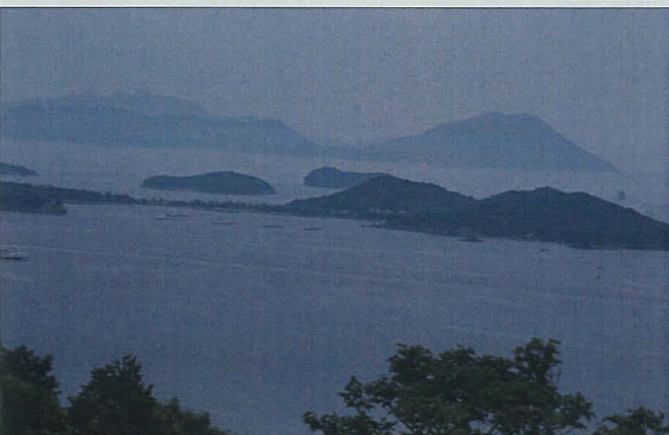
います。だから、そもそも「日本人」という国籍に頼った統計や世論調査をしても、もはや無意味な環境ができていくんです。

ところがおかしいことに、日本のマスコミはそうした現実を努めて視聴者に見せないようにしています。そして旧態依然の報道姿勢に固執することで、自らに社会的役割の急速な凋落を招き寄せているのです。そうした興味期限切れの報道機関の代替機能を現実に見奪したのがインターネットだとすれば、インターネットこそが現在的大海賊でしょう。

ところがその大海賊の支配領域では、ネトウヨとパヨクに代表されるような言論の幼稚化が急速に進行しています。他人の意見に辛抱強く耳を傾ける余裕が失われ、刹那的な感情に左右された粗雑な衝動の起伏が世界の表面を覆っているのです。情

瀬戸内海の島々

報流通の公海はいまや、未熟な海賊たちによって無秩序に占拠されていると言つて過言ではないでしょう。とはいえ、これは国家や権力が従



来のような発想で政治的な検閲を加えて統制すれば収まるような事態ではありません。むしろ時代遅れの領土問題の諍いといった偽りの話題の



横浜

焦点が、制御不能な事態を招く引き金になりかねません。

タックスヘイブン（租税回避地）

とは寄港地という語彙から生まれた表現で、闇金融の舞台は自由港と裏表です。マネーロンダリングも洗濯から派生した言い回しですが、かつて世界中の港で洗濯屋を営んだ余所者は、しばしば軍事機密を盗むスパイ機関の手先でもありました。財産の安全を確保することが、実際には脱税行為や脱法な洗浄稼業と隣り合わせであり、国家の安全保障も身分を偽った覆面の特務員による海賊的法律侵犯なしには維持しえない。だがどうも日本という島国に安住している人種は、そうした生き馬の目を抜くようなベテンにはひどく不向きな極楽蜻蛉として、敗戦後長らくの北米の核の傘の下で安全無害に飼育されてきました。

ガラバゴス化という形容もその証左なのでしたが、とすれば日本列島を文化的ガラバゴスという絶滅危惧種のサンクチュアリとして特化するのも、ひとつの見識かもしれませぬ。海賊が安心して横行できる解放区はたして極楽なのか、それとも地獄なのか。「世界一安全」なはずの極楽は、一瞬の後には「利権寡奪の無秩序な草刈り場」という地獄へと転じうる。しかし、そのような潜在的脆弱性を宿した危険地域において初めて、平和憲法の約束した「戦争放棄」すなわち「非武装地帯」の真実も見えてくるのかもしれない。韓国の三十八度線に始まる「非武装地帯」は野鳥の楽園と化していますが、竹島・独島を起点に、それを東海・東シナ海から東南海・南シナ海に至る海域へと延長することは無理な相談でしょうか？ 内政上の不



滿を軋嫁するだけの時代錯誤な領土意識や被害者意識に支配された軍事覇權、目先に囚われて結果的には枯渴を招く資源篡奪、面子の利權争い、地球規模での破綻を内蔵した金融的・商業的市場制覇の野望——。それらの既成秩序に依存した世界觀の

彼方に、無垢な海賊たちの遊技場としての非武装地帯を、鎖状の孤列群島に沿って設定できるならば、そのほうが世界の平和維持にとってもより貴重な貢献となるはずです。先日台湾に招かれて、そんな世界の近未来設計の夢を語り合いました。

外部権力による強奪と支配に蹂躪された歴史を背負う台湾は、stateとしての国際認知を失った nation として奇跡的な経済発展を遂げてきました。いわば国際法上で海賊的な操業に賭けることによって、度重なる戦争と植民地体験の中で困難な舵取りを実践してきた特異な島国です。また韓国は、分断国家として多くの困難を抱えつつも、国連の事務総長をも輩出しました。

その台湾の「海盜文化」、また非
武装地帯に対処してきた韓国の現実
から、日本列島と「倭寇」の未裔た
ちは、いまこそ多くを学ぶべき時期
を迎えているはずです。

*廖咸浩「華人海洋与台湾」海盜、別類現
代性、「後中国」動態」（史書美、梅家玲、
寧朝陽、陳東升〈主編〉『知識台湾』台湾
理論の可能性）（麦田出版、二〇一六）を
参照されたい。